

■ 特集 ■

## 「調査者」であり「わたし」であること ——フィールドワークにおける関係性の創発——

中野歩美\*

### 1. はじめに——長期調査前の不安

わたしは博士前期課程に所属していた2010年から現在まで、インド・ラージャスターン西部に広がるタール砂漠地域で、定住化した物乞い移動民として知られるジョーギーの人びとの生活実践を対象としてフィールドワークを続けている。2012年に博士後期課程に入ってから、長期調査のための資金の獲得や調査ビザの取得に向けて奔走し、周囲の人々の手助けもあって、なんとか2013年の夏からインドでの長期調査に出発する手筈を整えることができた。当時のわたしは、いよいよ本格的なフィールドワークをおこなえるのだという嬉しさの反面、ある漠然とした不安を抱えていた。それは日本の家族と長く会えなくなる不安でもなければ、日本ではありえない辛さの現地の食事についてでもなく、マラリアや狂犬病といった日本では珍しい病気や体調管理に対する不安でもなかった。わたしが気がかりだったのは、調査者として現地のジョーギーたちと関係性を築くことによって、彼らのそれまでの人間関係や生活実践、価値観などに不可逆的な変化をもたらしてしまうのではないか、という一点にあった。

一般的に人類学のフィールドワークといえば、B. マリノフスキ（2010 [1923]）が『西太平洋の遠洋航海者』のなかで提示した方法論が現在まで基本的な土台として引き継がれているといっただろう。それはたとえば、現地語を習得すること、現地での住み込みを通じて長期的かつ継続的にデータを集めること、現地の人びとからの信頼を勝ち取ること、ときにはカメラやメモを置いて自らも人びとの実践に参加すること、などである。しかしわたしには、調査者はどれだけ長く滞在しようとも、結局は調査が終わればフィールドから引き揚げていく「よそ者」には変わらないように思えた。一時的な滞在者であるにもかかわらず、滞在しているあいだは彼らの生活のありとあらゆる方面に首を突っ込もうとする「よそ者」に巻き込まれたせいで、現地の調査協力者たちのその後の人間関係や生活が変化したり、波風を立てたりするかもしれないことに何とも言えない耐え難さを感じていた。できることなら透明人間になって、人びとのそれまでの生活や、それ以降の生活に余計な変化を加えることなく調査をまっとうしたい。自らの存在を消してフィールドワークをおこなうなど当然不可能だとは分かっていたが、それでもできる限りそうしたいと考えていた。このような気持ちを持つに至ったのは、今思えば博士前期課程のときにおこなったフィールドワークのなかで、実際にそのような人びとの姿を何人も目にしていたためかもしれない。

\*関西学院大学先端社会研究所専任研究員

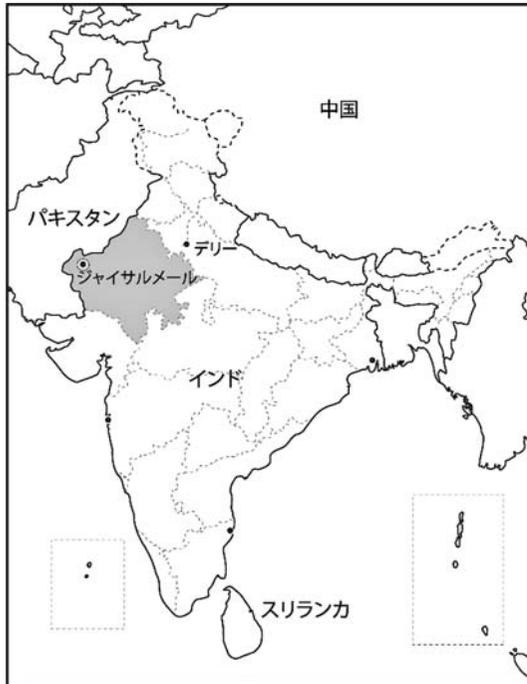


図1 調査地ジャaisalmer

主要な調査地のひとつであるジャaisalmerは、ラージャスターン州の最西端に位置し、パキスタンとの国境に面した人口約67万人の小都市である(図1)。ジャaisalmerは、12世紀にラーオ・ジャaisalmerによって建国されて以来、西アジアへ続く東西貿易の中継地として繁栄した。しかし、17世紀初頭の東インド会社の設立を足掛かりに、英国が支配を拡大するなかで、カルカッタ(コルカタ)やボンベイ(ムンバイ)を拠点とした海洋貿易が発達し、タール砂漠を経由する通商ルートの重要性は大きく低下していった。さらに1947年に実現した英国からの印パ分離独立によりパキスタンとの国境線が引かれると、ジャaisalmerの貿易の中継地としての役割は完全に消失したといえる。

そのような北西インドの最果ての砂漠地帯に暮らす人びとにとって、1980年代以降新たな収入源となっていったのが、生きた城(living fort)<sup>1)</sup>として知られるジャaisalmerの中心地にある城砦や、ラクダに乗って遺跡や砂丘を遊覧するキャメル・サファリ、さらには「インドのジプシー」<sup>2)</sup>たちのパフォーマンスなどを目玉として発展した観光産業である。博士前期課程在籍中に実施した予備的な調査では、初めて間近に見るラクダや砂丘もさることながら、そのような砂漠に囲まれた小さなオアシス都市であるにもかかわらず、海外の観光客と個人的な関係性を持つことで生計を立てたり、ビジネスに着手したりする人びとが少なからずいることに驚き、「ガイジン」との出会いによって現地の人びとの生活が一変しうること、わたし自身もそうした「ガイジン」の1人になりうることを強く認識するようになった。その結果、博士後期課程の長期調査前のわたしには、旅行客とは目的が異なるとはいえ、自分が関与することで現地の人びとの生活スタイルや価値観を変えてしまうこと、さらにはその人を取り巻く人間関係やライフコースにまで影響を及ぼしうることが、大きな不安となっていたのである。

- 1) ラージャスターン州は10世紀から12世紀にかけて、ラージプートと呼ばれる王族たちが各地に王国を建設し、領地や覇権争いを繰り返してきた。各地に残る城砦は、現在史跡として内部が見学できるように整備され、観光地化されているものがほとんどである。それに対してジャaisalmerの城砦は、現在も城砦の内部に寺院や市場、家などの人びとの生活空間が存在し続けていることから、このように呼ばれているという。
- 2) 北西インドは18世紀にH. グレルマンらがインド起源説を唱えて以来、「ジプシー」やロマと呼ばれる移動生活者たちの故地として知られるようになった。インドの独立直後から始まった国家的な文化政策や現地の知識人による保護活動を通じて、ラージャスターンの「民俗芸能」は「再発見」されていき、さらに1980年代になると西洋のメディアや音楽産業において、インドの「ジプシー・ダンス」や「ジプシー音楽」としてパッケージ化されていった(cf. Bharucha 2003; Joncheere 2015, 2017)。

## 2. 他者としてのジョーギー／他者としての「わたし」

すでに述べたように、わたしが調査の対象とするジョーギーの人びとは、かつて移動生活を送りながら宗教的な物乞いとして糊口を凌いできた人びとであり、定住化が進んだ今なお現地社会の周縁に位置づけられている。彼らの生活は、九州の片田舎で育ったわたしでさえ、自分の知っている「当たり前」と大きくかけ離れたものであった。一方で彼らからすれば、わたしは「ジャパン」という聞いたこともない遠くの「村」から、未婚の若い女であるにもかかわらず帯同者もなく、たった1人で「飛行機」という空飛ぶ乗り物でやって来た「ゴリー（白人）」<sup>3)</sup>であり、ジョーギーたちの「当たり前」の暮らしからは大きく逸脱した存在でもあった。初めて会う人に対しては、「今はデリー大学に所属があって、あなたたちについての本を書きたいから調査している」という月並みな説明を試みてはいたが、いまだにわたしの身分や滞在理由を正確に理解している現地のジョーギーはほとんどいない。それにもかかわらず出会ったジョーギーたちは皆、突然理由も分からず現れた「ゴリー」を遠方からやって来た珍しい客としてもてなし、迎え入れてくれた。

通常のフィールドワークでは、1つの村や地区、特定の場所など、全数調査が可能な範囲が調査地として想定されるが、わたしの調査の場合はそうはいかなかった。それは現地のジョーギーたちが、「先祖代々暮らしてきた土地」を持たない移動生活を送ってきた人びとだったためである。調査を実施した2010年代には定住する世帯が多くなっていったものの、必要に応じて現在も移動や野営生活を併存した暮らしを続けている人が大半で、しばらくたってから野営地を訪れてみるともうそこには住んでいなかったり、反対にたくさんの親戚や姻戚が住み着いて集落が拡大していたりということも珍しくない（cf. 中野 2022）。地縁的な紐帯をほとんど持たない彼らの生を支えているのは、婚姻を通じて複雑に織りなされた親族的紐帯である（中野 2018）。調査を始めた当初は、わたしにとっても訊きやすく、彼らにとっても答えやすい家族構成を調査項目の1つとして扱っていたが、次第にその複雑な関係性に興味・関心が高まっていった。ジョーギーたちは8、9人の兄弟姉妹がいることが多いため、一人一人の顔と名前を一致させるだけでも苦勞するが、そこにそれぞれの親族関係まで含めて記憶するとなると一層難しかった。日本では考えもしなかった、自分よりも一回り以上も年下の「オジ」や「オバ」、反対に自分よりも一回り以上も年上の「オイ」や「メイ」が存在するということは、頭では理解していても先入観が邪魔をして瞬発的な理解や正確な記憶の妨げになった。さらにジョーギーたちは、一度婚姻関係を結んで姻戚となった人びとを仲介者として新たに自分のキョウダイやイトコ、オイ・メイの縁談相手を探すため、たとえば父方オジの嫁（FBW, *kāki*）が母方オバ（MZ, *māsi*）であるというように、血族と姻族のどちらにも位置付けられる関係性がごく当たり前のこととして存在した。そうした彼らの複雑に絡まり合った親族関係は、何気ない会話のなかでただちに理解することができないため、後でノートに書き出しては何度も繰り返し確認して頭にいれなければならなかった。それでも、わたしが彼らの親族関係を憶えていて、「ああ、彼女の父親は〇〇の弟で、ジャーティ<sup>4)</sup>は△△でしょ」などと口にする、それを

3) ゴリーとは、「白い」という意味の現地語（女性名詞にかかる形容詞の語形）であり、相対的に彼らより色の白い「よそ者」を指して使われる呼称である。

4) 結婚や共食の可能範囲を示す集団区分を意味する言葉。カーストという言葉と互換的に用いられること

聞いたジョーギーたちは皆いつも嬉しそうに目を細めた——「そう、その通りだよ！聞いたかい？この子はわたしたちのことをすごくよく分かっている」、「娘の婚約相手はアユミに決めてもらおう、アユミはあちこちのジョーギーに会っていて、わたしたちのジャーティについてジョーギーよりもよく知っているから」。こうして長期調査を終える頃には、訪れた集落は30を超え、実際に訪れてはいなくても頻繁に耳にする集落の名前や位置、リーダー的な古老のジョーギーの名前とジャーティが頭に入った状態になっていた。

しかし実際の調査において、わたしから特定の集落に遠征する計画を立てたり、その手筈を整える協力を頼んだりしたことはほぼ皆無であった。むしろ、彼らの側から提案があったり、彼らがどこかに行くときにわたしにも誘いがあればついていくという受け身のスタンスだったので、何もなければ拠点の集落で過ごすか、街に暮らす友人の家を訪ねたりして過ごしていた。このような調査の進め方は、調査者の主体性を放棄し、調査の主導権をすべて被調査者に委ねるような、極めて消極的で効率の悪いものであったかもしれない。だがそれは、長期調査に入る前に抱えていた不安をうまく避けようとした自分なりの応答の結果だったように思える。未婚の女性が親元を離れて、1人で見ず知らずの人のもとで暮らすという、現地のジョーギーたちのあいだで共有された価値規範からは大きく逸脱した存在として彼らと出会っている以上、少なくとも彼らの集落で生活するあいだは、できるだけ彼らの「当たり前」に沿って過ごそうと決めていた。わたしの方から具体的な日時や場所を提示し、それに彼らを巻き込んでいくのではなく、彼らが出かけるときについていく、彼らの用事や出先での出来事に巻き込まれていくという方法は、言うなれば「積極的な受け身」という調査のスタイルだったのである。いつどの集落に出かけるかという調査計画にかかわることだけでなく、集落の外に1人で出歩かない、財布やスマートフォンを持ち歩かない、現地で手に入れたペンやノートを使う、車のチャーターはせず公共バスやオート・リキシャを使う、調査の御礼は現金ではなく写真をプリントアウトして渡すなど、なるべく「調査者」ではなくジョーギーたちと同じ目線の高さで生活する「わたし」として行動するように心がけた。いつの頃からか服やピアス、携帯電話やポーチといった身の回りの所有品は、出会ったジョーギーの誰かにもらったり誰かと交換したものへと変わり、さらに別の場所でそれを人にあげたり交換したりして、ジョーギーとわたしのあいだで循環していった。調査を始めて1年が経つ頃には、自分が日本から持ち込んだものを使うことはほとんどなくなり、バックパックは「念のために」と捨てずにいた無用の長物で一杯となった邪魔な荷物になり果てていた。他の集落に遠征する際の小さなリュックサックの荷物も同じように時が経つにつれて減っていき、1日分の服とノートとカメラと携帯電話のみだった。生理用ナプキンであれコンセントの変換プラグであれ、必要なものが出てくれば、彼／彼女らを気兼ねなく頼って良いこと、相談すればいつも一緒に「なんとかする」方法を考えて提案してくれることを分かっていたからである<sup>5)</sup>。

ㄨ も多いが、本稿の記載箇所ではカースト内部の下位集団にあたる外婚集団を指して使われている。

5) その場合の解決方法とは、必要品を購入してもらうことを意味しない。たとえば古くなった布をこっそり渡してくれたり、充電器のケーブルを刃物で裂いて導線をむき出しにして直接コンセントに差し込んだりなど、「あるものでなんとかする」方法である。

### 3. 流れに身を任せ、巻き込まれる

わたしが調査の拠点とした3つの集落のうち、もっとも長いあいだ滞在させてもらったのが、ジャイサルメールの市街地からそう遠くない村のはずれにあるN集落に暮らすJW氏の家であった。長期調査を始めた当初は、現地の大学教員に紹介してもらった市街地周辺の安宿に滞在し、オーナーの男性にアシスタントを務めてもらって近くのジョーギーたちが暮らすスラム地区へと通っていた。次第にそこに暮らすジョーギーのある家族と親しくなり、夕食をご馳走になったりそのまま夜も泊まったりすることが多くなると、ホテルに戻るのは数日に1度、荷物を取りに行ったりシャワーを浴びたりするための数時間程度になった。そのような生活をしばらくは続けていたが、物置と化した部屋に支払いを続けることに嫌気がさし、ついに宿のオーナー兼調査助手の男性に、ホテルの部屋を引き払いたいこと、彼に頼み込まれて数か月分先払いしていた宿泊料やアシスタントの報酬を返還してほしいことを伝えた。案の定わたしの意見は受け入れてもらえず、その後もその話をすると不機嫌になったり、涙ぐんだりする情緒不安定なオーナーとの話し合いは平行線をたどった。そんな折、週に1度パソコン教室に通うために市街地にやって来るJW氏の息子にそのことで愚痴をもらしたところ、「ならうちに住めばいいじゃん、誰も使ってない部屋もあるし。心配ならうちの母親と一緒に暮らせばいいよ」と思いがけない提案をされたのだった。JW氏の息子とは、彼が市街地に来たときに2、30分話をするだけであつたし、彼の両親や兄弟が暮らす集落には1度しか足を運んだことがなかったため少し迷ったのだが、ホテルの部屋を早く引き払いたかったことや、彼の聡明さに一目置いていたわたしは、このままの状態を続けるよりも拠点を移した方が面白いかもしれないという直感を信じて彼の提案をありがたく受け入れた。最終的にオーナーの男性に先払いしていたお金や置いていた本や服の一部を回収することは諦めざるを得なかったが、そのおかげでJW氏一家と縁がつながったのだと前向きに思いなおして新たな拠点で調査を続けた。

N集落での暮らしは、同じジョーギーの集落とはいえ、スラム地区のものとは大きく異なっていた。ジャイサルメールの各地や隣接する他県からやって来たジョーギーが100世帯以上暮らしていたスラム地区には、ジョーギー以外のコミュニティの人びとも同じように住居を構えて暮らしていた<sup>6)</sup>。地区の内部を歩き回るとは、ジョーギーの人びとだけでなく、それ以外の人びとの視線にも注意を払い、自らの言動に気を付けなければならないことを意味していた。ジョーギーたちとのあいだでも、わたしがどの家に行ったのか、誰とどんな話をしたのかは女性や子どもたちのおしゃべりの波に乗ってすぐに広まってしまうし、「携帯電話を買ってほしい」とか、「携帯電話のプリペイド分の支払いをしてほしい」、「あの人には支払いをしてあげたのだからわたしにもいいでしょう」、「結婚式のためにどうしてもお金を貸してほしい」など、高い航空券代を払って自分たちのもとにやって来ることのできる「ゴリー」をあてにした金銭の要求がひっきりなしにあった。

個人的にはスラム地区の調査中も毎日発見があり、それなりに楽しく充実した日々を過ごしていたつもりだったが、実際には思いのほか気の張りつめた生活をしていただと気づいたのは、N

6) 正確には、あるベールダール・カーストの家族が最初に不法占拠の形で住み着き、その後ジョーギーや他の集団もその不法占拠地を拡大する形で隣接して住み着くようになったという。現在では、同地区は正式な行政区として認められている。

集落に住み始めてからのことだった。N 集落には JW 氏夫妻と未婚の息子たち、その周囲に既婚の息子4人がそれぞれ暮らしており、構成員は全員で2、30名ほどしかいなかったため、すぐに全員の顔と名前を覚えられた。また、彼らの定住先が村の中心地から1キロほど離れていたこともあって、ジョーギー以外の村の人びとがわたしについて何か言ってくることもなかったし、彼らもわたしを村の人に対して見世物にするようなことはしなかった。ありきたりな言葉になるが、喧騒から離れた静かで穏やかな生活がそこにはあった<sup>7)</sup>。JW 氏夫妻からは3番目の娘だと言ってもらえるようになり、別の集落に行っても、JW 氏の家で受け入れてもらっているということで、「ゴリー」として扱われることが格段に少なくなった。

#### 4. 信頼する／信頼される

フィールドワークにおける調査者と現地の人びとの関係性の構築の過程について、N 集落での共同生活の経験から言えることがあるとすれば、それは一般的に教科書のなかで示される「ラポールの形成」という説明は、必ずしも適切ではないということだろう。現地の人びととの関係性や信頼とは、一方的に調査者が獲得していくものではなく、創発的に積み上げられていくものだからである。ラポールの形成、つまり調査者が現地社会のメンバーに信用してもらえるようになる過程とは、まさしく調査者である「わたし」自身が、現地社会のメンバーを信用できるようになる、という過程でもあるのだ。長期調査を終えて時間が経った今、その過程を鮮明に描出することはもはや不可能に近いため、ここでは「信頼を得る」ではなく「信頼する(ようになる)」ことに焦点を当て、調査中の経験として印象に残っているいくつかの出来事を取り上げてみたい。

##### エピソード1：100パーセントの信頼

あるジョーギーに帯同して別のジョーギーの集落にいったとき、初めて「ガイジン」を目にするその集落のジョーギーたちが必ずと言ってよいほど口にするのが、「彼女(あなた)はどうしてジョーギーの集落に来たのか」というものであった。それはわたしと一緒にやって来たジョーギーに向けられることもあれば、直接わたしに投げかけられることもあった。尋ねられたジョーギーは、「調査のため」でも「ちょっと遊びにきただけ」でもなく、「(自分への)100パーセントの信頼があるからさ(*pūrā vishvās hai*)」と言い、それを聞いたジョーギーたちも納得した様子で「そうか、全幅の信頼があるのか」、「そりゃ素晴らしい」と深く頷くまでがお決まりのパターンであった<sup>8)</sup>。わたしはそのやりとりを見るたびに、「得体の知れないゴリー(筆者)を100パーセント信頼しているのはそっちの方でしょう」と笑いそうになった。確かにわたしはお世話になっているジョーギーやその家族に悪事を働く気など毛頭なかったが、わたしからすると、ほとんど素性の知れない

7) ジョーギーたちの語りにおいても、しばしば「人の多さ」が移動の直接的な契機であり「人の少なさ」が定住先の選定条件としてあげられる。ここからも分かるように、彼らのあいだでは、「人の多さ」ゆえに発生する人間関係のもつれやトラブルをなるべく避けられる小数世帯での生活をより好ましい形態として志向する傾向が見られる。

8) 実際にわたしが「(帯同者のジョーギーへの)100パーセントの信頼」というフレーズで答えてみても、帯同者のジョーギー本人がそう答えた時と同じように「素晴らしい」といって深く頷かれる。

ゴリーに食事をふるまったり寝床を用意したり、わたしの興味を満たすために色々な話をしてくれる彼らの純粋さを不思議にさえ思っていたからだ。「わたしが彼らを 100 パーセント信頼している」と信じてくれているのならば、わたしもそれを裏切るような行動を取らないようにしなければいけない、とそのやりとりが行われるたびに思ったものだった。

### エピソード 2： どうしてお金を使ったのか

JW 氏の家に住み始めて 10 か月ほど経った頃、婚出してめったに会うことのできない娘たちの様子を気にかけている JW 氏の妻を喜ばせようと 1,200 ルピー（日本円で 2,000 円ほど）のフィーチャーフォンを買った。JW 氏の息子からもそれが一番喜ぶよと言ってもらえてわくわくしながら N 集落にもどったのだが、彼女は不機嫌そうな表情で「どうしてアユミにお金を使わせたのか。まだ学生で働いているわけでもないのに」と JW 氏の息子に言い放った。予想していなかった反応に少し残念な気持ちになったが、それ以上にわたしの財布事情を心配して怒るジョーギーの女性に初めて出会ったわたしは、雷を打たれたような衝撃を受けた。もしこれが村の権力者の一家の女性に言われた発言だとしたらここまで驚かなかっただろう。現地のジョーギーたちは、定住したからといって社会的なスティグマが取り除かれたわけではなく、現在も貧しい生活を送り経済的にも多くの問題を抱えている。それを考えれば、スラム地区のジョーギーたちのように、わたしのような「ガイジン」にあれこれねだってみることは、ある意味ごく自然な行動でもあるのだ。だが後にも先にも、自分のためにお金を使われたことで怒ったのは JW 氏の妻だけであった。たとえそれが表面上の演技だったとしても、わたしにはこの出来事があってから、より彼女を本当の母親のように感じられるようになったのだった。

### エピソード 3： お金の心配は必要ない

JW 氏の長男の家に滞在していたある日の夜、食事を終えて炉の周りで皆で焚火を囲んで団らんしていたとき、「帰国したらもう来なくなるのか」と聞かれた。わたしは、「もちろん来たいけれど、お金がないからすぐ来れるかは分からない。研究費を獲得できればすぐにでもまた来るよ」と答えた。「学生だからお金がない」というのは、調査を続けるうちにほとんど口癖のようになっていた定型文で、このときも口を開くと自然とそう答えていた。それに対して JW 氏の長男は、「そうか、ただお金だけが問題なのか。それなら心配ないよ。うちには今 4 頭のヒツジと 5 頭のヤギがいるだろう。それを売れば 1 回分くらいの飛行機代にはなるんじゃないか。だから 1 回分だけではあるけれど、また来れるようわたしたちが工面できるさ。お金のことなら心配するな」と答えた。わたしの正面に座り、焚火に照らされた真剣な表情の彼を前にして、逃げ口上でその場を取り繕おうとした自分の不誠実な発言を恥ずかしく思った。

ここで取り上げたエピソードは、わたしが調査中に経験した数あるエピソードのいくつかではない。このように、ラポールとは、「調査者」として現地の人びとの信頼を一方向的に獲得するスキルではない。関係性は絶えず創発的であり、それは彼らと共に過ごす時間のなかでの経験の共有を通して積み上げられていくものなのである。

## 5. おわりに——「調査者」であり「わたし」である存在として

帰国後、博士論文の執筆までは時間との戦いであった。博士論文や自著（中野 2020）においては、JW 氏をはじめとして、調査の拠点となったいくつかの集落のジョーギーたちとの関係性についてまとまった章や節として説明することはしなかった。むしろ、それ以外の集落のジョーギーたちと同じように、いったん「わたし」との関係性は切り離して、中立的な「調査者」の立場から対等に事例として分析の対象とするように心がけたつもりでいた。ところが先日、佐藤哲彦教授とお話する機会をいただいた際、自著で取り上げられた事例のうち、わたし自身が登場するいくつかの事例では、わたしとジョーギーとの親子的または家族的な関係性が色濃く表れており、それが興味深い特徴であるという思いがけない指摘を受けたのである。「この語り方は、いかにも母親が娘に対して何かを教えるときの語り方なんだよ」という先生のお言葉を聞きながら、「調査者」として現地で経験したさまざまな出来事は、同時に、「わたし」の人生経験の一部としても蓄積していくものであり、中立の立場から記述したはずの文章においてさえ滲み出るものであるという至極当然の事実、目から鱗が落ちた思いだった。翻って考えれば、調査中に遭遇するさまざまな出来事にいくら「調査者」として対応しようとしても、即興的な応答のなかで進む現場での出来事において、「わたし」を無色透明の存在にすることなど到底できるはずもないのである。現地の人びとの生活や価値認識に大きな変化を及ぼしてしまうのではないか、という調査前のわたしの不安は、そもそも調査を通じて創り出される関係性の在り方を根底から見誤ったものだったといえる。調査地で出会う人びとは、単なる「調査者」と「被調査者」としてではなく、「あなた」と「わたし」として、同じ目線の高さで対峙し時間を共有する存在でもあるのだ。言い換えれば、フィールドワークという特殊な調査法の醍醐味であり奥深さとは、「調査者」であり「わたし」である存在として、現地の人を巻き込んだり彼らに巻き込まれたりしながら、笑ったり泣いたり、ときには気まづくなったり怒ったり、「今・ここ」に共に居合わせた存在としてぶつかりあうことで創発的に立ち上がる関係性を積み上げていくことにあるといえるだろう。

### 参考文献

- Bharucha, R., 2003 *Rajasthan an Oral History: Conversation with Komal Kothari*, Penguin Books.
- Joncheere, A., 2015 Intangible Inventions: The Kalbeliya Gypsy Dance Form, from its Creation to UNESCO Recognition, *Archiv Orientalni* 83(1): 71-95.
- , 2017, Kalbeliya Dance from Rajasthan: Invented Gypsy Form or Traditional Snake Charmers' Folk Dance?, *Dance Research Journal* 49(1): 37-54.
- マリノフスキ, B., 2010 (1923), 増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』講談社.
- 中野歩美, 2018, 「北インドにおける婚資婚再考——ラージャスターン州西部に暮らすジョーギーの姻戚関係を事例に」『国立民族学博物館研究報告』42(3): 271-320.
- , 2020, 『砂漠のノマド——カースト社会の周縁を生きるジョーギーの民族誌』法蔵館.
- , 2022, 「複数の生活拠点をつくること——インド北西部の移動民と「定住」実践」, 三尾稔編『南アジアの新しい波 上巻——グローバルな社会変動と南アジアのレジリエンス』昭和堂, 79-98.